

VI. 「緑の国土軸」構想推進に向けた考察

本調査においてご協力いただいた「緑の国土軸」推進アドバイザーからの助言を整理し、「緑の国土軸」構想推進に向けた参考点を考察してみよう。

1. 「緑の国土軸」実践アドバイザー聞き取り調査

「緑の国土軸」実践アドバイザーの所属団体の活動の特徴をまとめると次表の通りである。

「緑の国土軸」実践アドバイザーの所属団体の活動の特徴

	タイプ		活 動 の 特 徴											
	自然環境保全・再生型	地域づくり型	自然環境荒廃への危機感	楽しさ	活動の継続	体験重視	地域資源掘り起こし・活用	ネットワーキ化	子供達への環境教育	一般市民の参加	グリーンツーリズム	活動の輪の拡大	地域への認知・浸透度	行政との連携
NP0 尾上町蔵利活用推進会		◎		○	○	○	◎	○	◎		◎	◎	◎	
白神倶楽部	○			◎	◎	◎							○	○
秋田県七滝土地改良区	◎	○			◎				○	○		○	○	○
鳥海山にブナを植える会	◎		◎		◎	○			○	○	◎	○	○	
森の仲間たち	◎		◎	○		◎			○					○
共生のむら すぎさわ		◎			◎	◎	◎				◎	◎	◎	
三条ホテルの会	◎	○	◎	◎	◎	◎	○	○	◎	◎		◎	◎	◎
NP0 にいがた森林の仲間の会	◎		◎	◎	◎	◎			◎	◎		○	○	◎
夢想塾		○		◎		◎	◎		○	○		◎	○	○
砺波カイニョ倶楽部	◎	○	◎	◎	◎	◎	○		○				○	○
(株)御祓川	○	○	○		◎		○	◎		○		◎	◎	○
美川自然人クラブ	◎		○	◎	○	◎			◎	○		○	○	◎
ハスプロジェクト推進協議会	◎		◎	○	◎	◎		○	◎	○		○	◎	◎
郷の森 里楽	◎		◎	◎	○	◎			◎	◎		○	○	◎
NP0 由良川流域ネットワーク	◎	○	◎	◎	○	◎		○	◎	○			○	○
NP0 里山ネットワーク世屋	◎	○	◎	◎	○	◎		◎	○	○			○	○
南但馬の自然を考える会	◎		◎		○	○		○	◎			○		○
NP0 法人上山高原エコミュージアム	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎		○	○	◎	○	○	◎

	タイプ		活 動 の 特 徴											
	自然環境保全・再生型	地域づくり型	自然環境荒廃への危機感	楽しさ	活動の継続	体験重視	地域資源掘り起こし・活用	ネットワーク化	子供達への環境教育	一般市民の参加	グリーンツーリズム	活動の輪の拡大	地域への認知・浸透度	行政との連携
鳥取市女性の森グループ	◎		○	○	◎	○		◎		○		○	○	◎
NP0 賀露おやじの会	○	◎		◎	◎	○		◎	○			◎	◎	○
もりふれ倶楽部	○		○	◎		◎			◎	◎		○	○	○
遊木民倶楽部		◎		◎		◎			○	◎		○	◎	
阿武町林業振興会		◎			◎	○	○	○		○		◎	○	
梨下村塾		◎		○	○	◎			◎			◎	○	○

注：◎特に強い特徴、○特徴（◎、○はとりまとめ段階で北陸経済研究所がマーク）

「自然環境保全・再生型」団体は、その活動スタートの動機は、『地域の自然環境荒廃への危機感』が多い。活動の特徴としては、『活動の継続』を最も重視する先が多く、活動継続のため、『楽しさ』、『体験重視』を柱として活動を展開している。『楽しさ』、『体験重視』が一般市民参加・啓発、次代を担う子供達への環境教育における有効なツールとなっている。

「地域づくり型」団体は、地域興しの方向、引きつける魅力として『地域資源掘り起こし・活用』、『楽しさ・体験』をポイントとしている。地域づくりの活動の輪を地域に浸透させ、活動継続・拡大のエネルギーとしているのが大きな特徴である。

2. 自然環境保全・再生型の地域活動

（1）自然環境保全・再生活動のきっかけ、エネルギー —地域の自然環境荒廃への危機感—

子供のころ遊び親しんだ地域の自然環境がどんどん荒廃を続けている状況に対する危機感が、実践アドバイザーの地域の自然環境保全活動スタートのきっかけとなっているケースが多い。

「なんとか昔の豊かな自然を取り戻したい」、「たとえ微力でも自分達にできることはないか」、「自然の大切さを子供達にも伝えたい」という思いが、多くの仲間を呼び込み、地道な活動を継続するエネルギーとなっている。

自然環境保全・再生活動スタートの動機、活動継続のエネルギー

	自然環境保全・再生活動スタートの動機
鳥海山にブナを植える会	鳥海山にブナを植えたかつてのブナ林を取り戻したい
森の仲間たち	山歩きをし里山は荒れていると気づき森林ボランティア活動に参加
三条ホタルの会	子供の頃から親しんできた大崎山の自然再生に何かできないか
NPO にいがた森林の仲間の会	放置されている里山に自分達ができる範囲で何かできないか
砺波カイニョ倶楽部	平地の緑「屋敷林」がどんどん減少。屋敷林に代わって訴えたい
(株)御祓川	町の賑わいを取り戻そうとしたら汚れ異臭を放つ御祓川があった
美川自然人クラブ	気がついたらハリンコ(トミヨ)が全くいない危機的状況
ハスプロジェクト推進協議会	三方五湖が汚濁、昔の豊かな自然を取り戻したい
郷の森 里楽	自分が生まれ育った里山に人の手が入らず荒れ放題であることに危機
NPO 由良川流域ネットワーク	由良川がこんなに汚くなった。昔のようにもっときれいにしたい
NPO 里山ネットワーク世屋	失われていく世屋地区の棚田、美しい景観、文化を守りたい
南但馬の自然を考える会	氷ノ山の荒廃が進み、「穴のあいた所を手でふさぐ」活動が必要な状態
NPO 法人上山高原エコミュージアム	高原の自然がかなり荒廃し特にススキ草原は壊滅的状況
鳥取市女性の森グループ	森林保全が非常に大変な状況にあり、自分達も何かできないかを考えた

(2) 息の長い活動 ―活動の維持・継続―

地域の自然環境再生や保全は、世代を繋いだ息の長い取り組みが必要である。しかも、本来地味で目立たない報われない継続活動であり、1日だけのイベント開催では終わらない。

一方で仕事を抱えながらボランティアで活動する人も多く、自分達の思う活動を維持・継続するため、無理はせず身の丈に合った取り組みに徹する先が多いのも特徴の一つである。これが、地域外の活動グループとのネットワーク化の動きは意外と少なく、活動の拡大も地域内に限定というケースが多い原因となっているように思われる。

また、各活動の中心となっている人達は 50 歳代以降の人が多く、各取り組みでは、一般市民や次代を担う子供達への楽しい環境体験の場を積極的に創り出し、自分達の活動をいかに次の世代に引き継ぐかに注力している。

自然環境保全・再生活動の維持・継続

	自然環境保全・再生活動の維持・継続
白神倶楽部	・楽しいと思うことを会員が自分でやる。それを会が応援していく。結果的にそれが山を守ることになる」。倶楽部が 20 年も続き、会員が増えている秘訣は、この「身の丈活動」にある。
鳥海山にブナを植える会	・会員の仕事に支障がない活動でなければ長続きしない。長く続けるため、植樹本数をしぼり丁寧に管理していく方針へ転換。年 2～3 千本植樹した年もあったが無理があった。無理が積もれば会の活動は破綻する。身の丈に合った地に足が着いた活動を目指しあまり余分な仕事は増やさない。
森の仲間たち	・現在米沢周辺の人を対象としている。エコツーリズムやグリーンツーリズムなどもしてみたいが、まずは地元が目覚めるよう頑張る。

三条ホテルの会	・自然環境保全活動は継続していくことが重要であり、後継者をどう育成していくかが大きな課題。
NPO にいがた森林の仲間の会	・あまり深刻に考えず、山の自然を楽しむ延長にボランティアの森づくり活動があるぐらいの気持ちでないと長続きしない。柱の人以外は、興味ある活動に参加し、“楽しかった”、“こんなことが経験できた”で良いし、そうした体験や思いが子供達に伝わり口コミで広まれば良い。
砺波カイニョ倶楽部	・規則でしぼらず楽しみながらをモットーに活動を続け、若い人、母子にも参加してもらい、木々や緑と一緒に暮らすきっかけにしたい。
美川自然人クラブ	・活動のモットーは「一時の思いつきなら誰でもできる。継続していくことが大切」。地道に活動していたら仲間の輪が自然と広がってくる。
ハスプロジェクト推進協議会	・再生ビジョンは(案)がついたままである。どんどん新しい内容を追加し、一度作ったビジョンに縛られず当分(案)のままでいく。
郷の森 里楽	・できるだけ多くの人の参加を得て、楽しみながらゆっくりと確実に進むことを目指す。一般市民や女性も、山の活動に顔を出してもらうだけでも良いという感じで進めている。
NPO 由良川流域ネットワーク	・事業は皆で意見を出し合い出来る範囲のものを行っていく。補助金を出すとと言われても人的な制約から大きな事業は無理。
NPO 法人上山高原エコミュージアム	・規模もまだ小さく現在は足下を固める段階にあり県境をまたいだ交流の段階にはない。一人でも多くの人が活動に参加することを目指したい。
鳥取市女性の森グループ	・自分たちの思いをベースに、自分たちのできることを少しずつ積み重ねてきた。「女性の森」はこれからも孫と同じ気持ちで育みたい。 ・鳥取市女性の森グループの活動をさらに充実し、是非若い女性たちの参加も増加させ、自分たちの思いを引き継いでいきたい。
阿武町林業振興会	・林業振興会を中心に、多くの人々の協力を得ながら、山・里・地域の健康と活力を取り戻すための様々な活動を実施。

(3) 楽しい体験の場づくり

各団体は、一般市民や子供達に、自然のすばらしさ、大切さを理解してもらい、自然に対して興味・関心を持ってもらうため、楽しい体験機会の充実に努めている。

「頭で環境や自然保護の重要性を理解していても、実際に体で体験するとまるで違ってくる。汗をかき大変だったが、終わってみれば楽しい経験だったが大切」(鳥海山にブナを植える会：須田さん)というように、楽しい体験を通じて、自然の大切さを伝えている。

楽しい自然体験の場の提供

	自然体験	楽しい体験への工夫
白神倶楽部	白神岳避難小屋、白神クラブ事務所	・終わった後の楽しい飲み会
秋田県七滝土地改良区	水源の森での「水環境学習体験」	・ブナの大木に聴診器をあて水を吸い上げる音を聞く。

		・ブナ林の腐葉土の水分吸収の確認実験
鳥海山にブナを植える会	ブナ林の植栽	
森の仲間たち	野鳥・白猿・植物観察会、下刈り・伐採体験、木工クラフト	
三条ホタルの会	野遊び楽校(自然観察会)、夏休み自然塾、ホタル観察会、ホタルの里づくり、炭焼体験	・火起こし体験、薫製作り、リース作り ・川辺の生物観察、川の流速測定、小型定置網で生き物採集・勉強、粗朶づくり
NPO にいがた森林の仲間の会	間伐作業体験、炭焼体験、炭アート作り、森の探検隊、里山学校	・自然に関するクイズ、ネイチャーゲーム ・里山の滝の水源探検
砺波カイニョ倶楽部	屋敷林の手入れ手伝い、屋敷林見学会、親子体験	
美川自然人クラブ	ふれあい昆虫展開催、とみよ飼育水槽設置、子供自然観察会	・美川ふるさと自然マップ作成ー小学校・保育園に提案箱を置き「ここにこんな生き物がいます」を募集
ハスプロジェクト推進協議会	かや田での水田体験、生き物観察	・要所に網をかけどんな魚がどれくらいかかるか観察
郷の森 里楽	下刈り・間伐体験、ビオトープ作り、シイタケ植菌、エコキャンプ	・自然体験、ネイチャーゲーム
NPO 由良川流域ネットワーク	自然体験、生き物観察、サケ放流	・川底が見えるボートで川底の生物観察 ・川の透明度測定
NPO 里山ネットワーク世屋	里山の自然、生活体験	・里山案内人講座(樹木の名前を知ろう、里山の民家探訪、里山の味覚を楽しむ) ・ばい投げの体験
南但馬の自然を考える会	自然観察会、自然体験・学習会、森づくり	・親子づれ森の観察会 ・雪中キャンプなど
NPO 法人上山高原エコミュージアム	自然観察、自然体験、生活体験などの様々な体験プログラム	・新緑・紅葉・かんじきハイキング、キャンプ ・草原火入れ、棚田の田植え・収穫、炭焼き体験、きのこ採りとピザ作り ・木工細工、草木染め、ツル細工体験など
鳥取市女性の森グループ	森づくり、植樹活動、森林教室	・他地域の自然環境団体と連携
もりふれ倶楽部	自然観察、自然体験	・間伐材を利用した動物づくり、ネイチャーゲーム、「コケ玉」づくり、紙漉体験、山菜を使った料理教室など

(4) 活動の場確保と地域の理解

地域の自然環境の再生や保全への思いが熱く、その活動が意義のあるものだとしても、活動を展開できるフィールドがなければ活動は展開できない。例えば、個人所有の里山や用水で、勝手に下刈り・伐採や植林活動、水路の改変を行うことはできない。

実践アドバイザーのお話の中では、活動フィールド確保が最も重要であると共通している。会の存在や活動内容を地域になかなか理解してもらえず、ある程度自由に活動できる場所を確保するのに大変苦労したというケースが多かった。

地域の理解獲得、活動フィールド確保に当たっては、行政のバックアップ、〇〇賞受賞、マスコミの報道が大きな力となっている。

活動フィールドの確保

	活動フィールド	活動フィールドの確保
白神倶楽部	白神岳避難小屋	深浦町
秋田県七滝土地改良区	水源涵養保安林	秋田県七滝土地改良区自己所有
鳥海山にブナを植える会	鳥海山内の公有地	旧象潟町、旧矢島町と『緑の森づくりに関する協定書』を締結
森の仲間たち	里山	米沢市内4ヶ所を借り受け
三条ホテルの会	三条市大崎山の私有里山	所有者が自由に使って良いと了解
NPO にいつた森林の仲間の会	にいつ丘陵市有林	新潟市(旧新津市)から市有林管理を受託
砺波カイニョ倶楽部	砺波市内屋敷林	個人の屋敷林の保全手伝い
(株)御祓川	七尾市内御祓川	空き店舗を買い取り改装
ハスプロジェクト推進協議会	若狭町中山地区の「かや田」	若狭町町有地
郷の森 里楽	越前市「みどりと自然の村」	市有林
NPO 里山ネットワーク世屋	宮津市世屋地区	地域住民のコンセンサスを得ながら活動
南但馬の自然を考える会	氷ノ山山麓地帯	兵庫森林管理署の許可と協力を得て活動
NPO 法人上山高原エコミュージアム	上山高原	兵庫県土地開発公社所有地がベース
鳥取市女性の森グループ	女性の森	鳥取市「とっとり出合いの森」を借り受け
もりふれ倶楽部	松江市「ふれあい森林公園」	島根県緑化センターから公園管理を受託

3. 地域づくり型の地域活動

(1) 地域資源の掘り起こしと活用

地域づくり型活動のキーワードは『地域資源の掘り起こしと活用』である。いずれの取り組みも、画一化された生活様式から、体験を通じた多様な価値観に基づく豊かな生活様式の提案がベースである。

①「NPO 尾上町蔵利活用推進会」

地域における農家の減少と後継者不足をなんとかしたいと考え、グリーンツーリズムに着目した。他にはない尾上町独自の魅力として農家庭園、蔵、生け垣を掘り起こし、地域全体として地域資源を再生し、活用する動きにまで高めている。

②「共生のむら すぎさわ」

『農山村の生活スタイル』を地域資源としてとらえ、地域全体を巻き込んで、農林業、藍染め、チェーンソーアート、つる細工、さしこ、木工など様々な農山村生活体験のメニューを揃えたデパートの様な体験村である。都会にはない『農業をしながらのこういう生活スタイルもあるよ』という提案である。

③「夢想塾」

地域で埋もれ朽ちかけていた『生活の工夫や遊び、自然との触れあいの知恵』を掘り起こし自らが体験し楽しむ取り組みが、地域に波及し生活に豊かさや潤いをもたらす光を放ち始めた事例である。

④NPO法人上山高原エコミュージアム

上山高原の豊かな自然や生活、文化を「生きた博物館」としてとらえ、地域資源として保全を図りながら地域振興にも活かしていこうという取り組みである。

⑤「NPO 賀露おやじの会」

港町「賀露」活性化へのチャレンジが、風の強い鳥取に適した自然エネルギー「風車建設」であった。風車建設の取り組みが、会の組織化、環境問題への取り組み、他グループとの交流拡大の契機となった。

⑥阿武町林業振興会

間伐材を海に沈めて魚の住処とする『間伐材漁礁』、地元産材を使った在来工法住宅や化学傷害者用避難住宅の建築など、森林から生み出される地域資源の活用を目指している。

(2) 地域興しの活動を地域に拡大

各事例ともに、地域資源掘り起こし・農村生活体験を核とし、地域興しの活動を地域に拡大している。積極的に新しい試みにチャレンジし体験メニューの充実を次々と図るとともに、地域農産品・特産品との繋がりを強化し、色々な人達が自らの問題として地域振興に取り組む体制を目指し、ネットワークを強化している。

①「NPO 尾上町蔵利活用推進会」

農家仲間6人で「ファームスティ」事業をスタート。地域農家の意識改革の起爆剤となり、受け入れ農家は27軒に拡大。さらに、新しく全国の中学生修学旅行受入を進める中で、近隣1市4町農家80軒の受入ネットワークを構築した。

②「共生のむら すぎさわ」

町とJRが出資した宿泊施設ができた時、地区の人たちと一緒に『体験のむら』を作り、宿泊客の農村体験の受入れ体制を整備した。

地元産イタヤカエデ樹液の活用を目指す『メープルサップ研究会』、地元農産品会員制販売組織『ふるさと倶楽部』開設など、農村体験と地域農産品・特産品販売を組み合わせた地域振興へと進化を続けている。

③「夢想塾」

夢創塾の活動がマスコミで紹介されることが多くなり、小学生の遠足や課外学習、都会人の家族やグループ単位の参加など、夢創塾の体験利用者がどんどん増えてきた。自分が遊びたい・楽しみたいとスタートした夢創塾が、体験のベース基地の役割を果たすようになっている。

富山県内には他にいくつもの自然体験の場がある。夢創塾は、いろいろな形態の自然体験グループとのネットワーク化の仕組みづくりを進め、体験機会の拡大を通して、地域文化の保存、掘り起こしを目指している。

④NPO法人上山高原エコミュージアム

活動が、地域振興や活性化につながるには、それが、地域の産業の一部に組み込まれ、住民生活の維持・向上に結びつくことが重要である。このため、サテライト部会を設け、地域資源の発掘や特産品開発に取り組んでいる。地域住民が都市住民と関わる形で活発に活動することで、地域に刺激を与え活性

化することを目指している。

⑤「NPO 賀露おやじの会」

環境問題への取り組みに限らず様々な文化活動や科学活動のグループと仲間作りを行い、交流ネットワークがどんどん拡大している。山、海、都会のグループをうまく組み合わせれば、色々おもしろいことができる。例えば、都会の市民劇やミュージカルを山や海でやると非常におもしろいイベントになった。

⑥遊木民倶楽部

「遊ぶ」「楽しい」をキーに活動の輪を拡大。色々な森林活動は有効だが人が集まらない。「人が気楽に集まれる訴え方と取り組み方が必要であり、間伐や下草刈り自体を遊びにしてみればいい」という発想で活動を展開した。雪山遊び、自然の中での生活体験、イベントと地域民泊の組み合わせ、ジャズ・ベンチャーズサウンド・笙のジョイントコンサート・花火打ち上げなど、ユニークなイベントを実施。

⑦阿武町林業振興会

林業振興会の「間伐材漁礁」開発、『あったか村』を中心とする在来工法住宅建築や化学傷害者用避難住宅など地元産材の利用促進に加え、自然探訪、きのこ・山菜狩り、木工教室などの体験事業、出張展示など都市との交流事業を積極的に実施。都市住民との交流を通じて、地元住民自身が林業の楽しさ・面白さを再発見することを目指し、地域活性化と林業離れ防止に取り組んでいる。

⑧梨下村塾

梨下村塾は、環境学習の一環として小学生を対象に梨栽培体験学習を永年にわたり引き受けている。さらに、梨下村塾の大学生の農業体験の受け入れが契機となって、「学生耕作隊」立ち上げ、NPO 化へとつながり、現在は卒業生によるシニア耕作隊も結成されている。「学生耕作隊」は摘花作業、袋かけ作業、選果作業など地域の梨農家の繁忙時にはなくてはならない存在にまで定着している。

4. 行政への要望事項

＜自然環境保全・再生型＞

- ・ボランティア活動は無償活動、安上がりなものという考え方がいまだに強く、そういう考えをベースに助成が行われるケースが多い。行政から受託事業や助成金をいただいているが、人件費は対象とならないなどの厳しい条件が多い。例えば、自然環境の保全・啓発活動は安全が第一であり、活動参加者への保険料もばかにならない金額となる。新津丘陵まで 30km を車で手弁当で参加する人も多く、やはり、ボランティア活動にもそれなりの報酬があつて良い。ボランティア活動の実状に即した支援を是非お願いしたい(NPO にいがた森林の仲間の会)。
- ・里山保全は、生態系の維持、故郷の景観維持、国土の保全や水源涵養にもつながっていく。里山は山と田、山と居住地の接点である。環境省、国土交通省、農林水産省はもう少し縦割りの考え方をなくし横断的に対処してほしい(郷の森 里楽)。
- ・行政にはよく“予算がないから”と言われる。お金よりもっと人を出すとか知恵を出すとかしてほしい。行政はまちづくりに大きな力を持っており、行政と一緒に活動をしたい((株)御祓川)
- ・行政は、定量的に数字で把握できるものばかりでなく、長い目で地域の緑や生活のあり方に目を向け対処してほしい。それには遊び心も大きな要素である。グリーンツーリズムの来訪客数増加といったストレートな成果を求めず、回り道も必要ではないか。屋敷林でも山でも、人と木との付き合いは、

もっと長い目でみていくことが必要であると思う(砺波カイニョ倶楽部)。

- ・行政は、いまだに行政単位で動いているが、現在はそういう時代ではなく、市や町、県という境を超えた活動が必要である。そうすると、新しいものの見方が生まれてくる(NPO 由良川流域ネットワーク)。
- ・氷ノ山の原生状態の自然は非常に危うい状況にある。観光開発も自然保護の観点から適正な利用方法を考えていかないと取り返しのつかないことになる。行政は、自然環境保全、観光振興・地域開発のどちらも立てねばならない立場からの政策であり中途半端なものになっている。将来に向け緻密にシミュレーションし対策を立てないと自然の荒廃が進んでしまう(南但馬の自然を考える会)。
- ・全て自然まかせでは自然は荒れ放題となる。地域の緑のあり様も時代とともに変化しており従来型の方策では豊かな自然は維持できない。問題は自然環境保全のための資金投下に社会的合意が形成できるかである。国は、時間をかけてでも、それぞれの地域の自然は国全体の財産という考え方を広めていかねばならない(NPO 法人上山高原エコミュージアム)。
- ・緑の保全活動を行うには、自然の生態や森に関する正しい指導がどうしても必要であり、指導者の充実が必要(鳥取市女性の森グループ)。
- ・伐採などボランティア作業は、原則交通費と燃料代程度が実費で、それ以外は色々な補助事業や委託事業を集めてやっている。行政の助成事業のデータベースなどがあればありがたい(もりふれ倶楽部)。

＜地域づくり型＞

- ・蔵は個人の所有物だが、確実に地域資源である。個人の所有物に税金を出しにくいのは、町だけでなく県も国も同じだが、行政が負担して保存していかなければ、町の財産、オンリーワンの地域資源がどんどん減っていくだけだ(NPO 尾上町蔵利活用推進会)。
- ・助成対象に NPO 法人が入っていない。事業主体に NPO 法人を付け加えてほしい(NPO 尾上町蔵利活用推進会)。
- ・旅館業法やそれに基づく条例を例にすれば、条例で書いてない事柄は、保健所や担当者の判断になる。例えば、民宿の風呂は山形県の条例に規定がなく、家族と同じでよいという判断と別に作る必要があるという正反対の解釈が起こる。グリーンツーリズムを進める時、規定を厳しく考える場合とゆるく解釈する場合で全然違う。地域が元気になるためにどうすればいいかという観点から考えてほしい(共生のむら すぎさわ)。
- ・行政と NPO が協働した方が良い事業がある。NPO が行政の企画に加わり能力を高めていけば、行政と一緒に考え、より具体的で効果的な方策がいろいろ出てくる。形にはまらない NPO の特徴とネットワーク力を活かす方向を是非検討していただきたい(NPO 賀露おやじの会)。
- ・行政がいくらプロジェクトを作っても自然の有効活用はできない。例えば、木の利用を訴える役所は、机も建物もスチールと鉄筋で木を使っていない。森林や自然について学ぶには、自然の中で楽しみながら「食べる」「動く」といった体験が重要であるということを理解してほしい(遊木民倶楽部)。
- ・グリーン、エコ、スローツーリズムを統合して広域でやりたいが、行政同士は情報交換が足りない。他の市町村のことを知らないし、連携して相互にやっていくのが難しい(梨下村塾：永嶺塾長)。

5. その他の参考意見

上に述べた以外の参考となる意見を列挙する。自然環境再生・地域活性化を实践されてきた方々の意見だけに、示唆に富んだものが多い。

(白神クラブ：笹森さん)

- ・世界遺産白神山地は観光資源としての価値は高くない。車で山には入れず登山道はきつい。つらい山登りをしてまで見たい人はそんなにいない。白神登山の魅力は、山頂をきわめることなく、森を縫って歩く楽しみ。それも道なき道を歩くこと。

(NPO 尾上町蔵利活用推進会：佐藤さん)

- ・自分たちでやれるものはやる。役所ができるものは役所で、できないものは民間で。役所がどう思っているかはわからないが、我々は協働の精神でやっている。
- ・尾上町は、観光業者に振り回されないグリーンツーリズムで、農業を中心とした地域の活性化をしたい。それをきっかけに商工業者との連携、活性化も狙っていきたい。それぞれの地には、昔から培ってきた文化がある。人が来て金が入ればよい訳ではない。
- ・自分で販路を拡張していけない農家は、やがて淘汰される。農業について愚痴を言う人は大抵販売先が農協の人である。農業に熱意のある人は自分の販売先が確保されている人だ。目標のないところには人が集まらないし、後継者も育たない。

(秋田県七滝土地改良区：藤岡さん)

- ・過度に人の手をいれず、自然のバランスが崩れないようにすることが大切。ブナの巨木は 400 年の間、自然の法則に従い成長した。水源涵養保安林は、あまり手を加えないで自然にまかせていくのが一番だ。水が蒸発しないよう、地肌を覆ってやるのがなにより水源涵養。
- ・「環境の保護・保全」は、とても難しいことのように思われるが、ご飯粒 1 つでも捨てないで大切にしようという気持ちや、ゴミを捨てない、生活排水やゴミを減らすなど、日常生活そのものが自然環境保全につながる。

(鳥海山にブナを植える会：須田さん)

- ・元々、行政にあまり頼らないでいこうというのが会発足以来の方針でした。補助金に頼りすぎると、活動が弱体化し、長続きしないと皆が思っています。行政との関係では、町との協定によるブナの植樹場所確保が最も重要であり、後は、会議場所を無料で貸してもらう程度にとどめています。

(森の仲間たち：白壁さん)

- ・公益の森づくりの企画策定にかかわる委員会での行政の企画書には、人間や動物や植物に関することが全然入ってなくて、山や木の経済性のことばかり書いてあった。

(共生のむら すぎさわ：栗田さん)

- ・なんとか村で暮らす意義をもちたい。お金ではなく、どんな暮らしができるかという尺度で考えれば、農山村の暮らしは決して貧しくない。
- ・地域のいろんな人がかかわり地域が活性化してくる。囲い込み方式は地域の活性化につながらない。

(三条ホテルの会：小林さん)

- ・自然環境、生活環境の保全の理念や方向は立派だが、誰が主体となり取り組むかが問題である。

(NP0 にいがた森林の仲間の会：小林さん)

- ・ボランティア活動は、時がたつと参加者が固定化しマンネリ化していく。自分達だけの活動にとどまらず、活動の範囲をできるだけ広げ、多くの人に理解してもらう努力が必要である。
- ・野外授業で生徒が蜂にさされる事故を耳にする。これは不用意だからであり、自然は決して甘くないと思ってかからねばならない。「にいがた森林の仲間の会」では事前に自然観察コースを点検し、スズメバチやクマンバチが飛んでいないか点検しコースを設定している。頭だけで理解するのではなく、体・目で確認し五感で感じて納得し、企画を組み立てないと事故につながる。

(夢想塾：長崎さん)

- ・地区のお年よりたちの山で生活するための知恵や技術を絶やしてはいけない。炭焼き、和紙、小屋作り、山の幸の料理など我々はあまり上手に受け継いでいない。是非自分が年寄りたちから教わりたい。
- ・今の子供は、自然の中での遊び方を知らず、知識はあるが知恵や技がない。自分たちの周りにこんなに遊び場があるのに、なぜゲーム機で遊ばないといけないのだろうか。それは大人が遊ばないからだ。
- ・建物を建てる場合は一人でもできるが、ソフトの場合は、一人でやっていると広がらない。マスコミなどに声をかけ、他のグループなどともネットワークしていきたい。

(砺波カイニヨ倶楽部：柏樹さん)

- ・緑地として CO2 削減効果や、クーラーを使わない電気削減効果などの数値化できることも大切だが、木と共に生きることの恵みや豊かさをもっと提示すべき。昔の人は屋敷林と共に生活することにより物的恩恵を受けるだけでなく、自然への畏敬や木の成長や息づかいから豊かな情操を育んでいた。

((株)御祓川：森山さん)

- ・民間でやっていて一番良いのは「選べること」。要はえこひいきしやすいことです。

(美川自然人クラブ：北野さん)

- ・住民の理解を得るのは本当に大変である。以前は、生活排水を流さないようお願いすると『俺たちの生活とどっちが大切なのか』とよく言われた。だから、年2回の草刈りや『親子ふれあい自然観察会』などを通じて理解が得られるようにしている。
- ・自然人クラブは『なんでもかんでも自然保護』ではない。開発と調和を図りながら、楽しく自然を守る活動をしていきたい。

(ハスプロジェクト推進協議会：三浦さん)

- ・よく自然保護と言われるが、人間が自然を保護するなどという思い上がった考えではなく、人間が自然の中で生かされて生きているということを再認識するための活動だと思っている。人間だけが勝手なことをして、大きないのちの環から外れないようにしなければいけない。
- ・三方五湖には川から水が流れ込む。川には、生活排水、田や梅畑に散布する農薬も入ってくる。湖や川、水辺の自然環境には、意識するしないにかかわらず多くの人が関係している。ハスプロは、環境を守る意識の薄い人や環境より開発を優先する人とも対立するのではなく、多くの地元住民に入会していただき柔軟な体制で、自然との共生の輪をどんどん広げていきたい。

(郷の森 里楽：上野さん)

- ・里山は、学校の総合学習の教材として活用できるものの宝庫であり、自然や色々な動植物の生態観察

を通じて、子供達が自分の目で見て考えることができる。昔は学校で管理する「学校林」が結構あったが、維持・管理が大変なため整理されたものが多い。郷の森里楽の活動拠点である里山を、「学校林」として使えるまでに自然を修復していくことが夢。

(NPO 由良川流域ネットワーク：町井さん)

- ・住む人にとって魅力のある良い町を目指すことが大切だ。住んでいる人の生きる態度、生活が町に現れてくる。多くの人が、豊かな自然の中にいながら、自然の楽しさを忘れている。

(NPO 里山ネットワーク世屋：飯尾さん)

- ・会員になった住民は、自分が住む世屋をもっと良くしたいという人。会員数増加には、特に積極的に取り組んでいない。その人に興味がなければ、会員になっても参加しないと考えている。

(南但馬の自然を考える会：盛谷さん)

- ・兵庫県ではコウノトリは自然保護の象徴となっているが、これはコウノトリが自然の中で生息できなくなった結果である。コウノトリが自然の中で生息できる状況をいかに守っていくかという考え方・視点が重要である。自然環境は何もしないでは守れない。

(NPO法人上山高原エコミュージアム：小畑さん)

- ・自然環境保全だけを進めるのは比較的容易。過疎化、地域の衰退が進んでしまうと守れる自然も守れなくなる。自然環境保全と地域興しの両立は、そこに住む人との関わりの中で進めねばならないから難しい。まず地域住民が都市住民と関わる形で活発に動くことで、地域に刺激を与え活性化する。

(鳥取市女性の森グループ：井関さん)

- ・千代川源流の森を訪ねたことから生まれた自分たちの思いをベースに、自分たちのできることを少しずつ積み重ねてきましたら、このようなグループになりました。

(NPO 賀露おやじの会：藤田さん)

- ・「これはおもしろい」「子供達の驚く顔がたまらない」という、楽しさ・おもしろさが活動の原点。
- ・環境への取り組みでは、『正しい理念づくりより、まず仲間づくりが大切』。
- ・企画・段取りは何をやるにも必ず必要。事務局・裏方の仕事は、ポイントを押さえれば変わらない。

(もりふれ倶楽部：野田さん)

- ・間伐材も、間伐してもらうために植えられたのではない。なんとか利用する方法を考えていきたい。

(遊木民倶楽部：大島さん)

- ・名誉職としてやったり、助成金目当てでやるのはボランティアではない。やりたい人がやれる範囲でやるのがよい。

(阿武町林業振興会：白松さん)

- ・林業者が木を語らないで誰が語るのだろう。もっと町へ打ってでよう。

(梨下村塾：永嶺さん)

- ・農業と民宿との共存はなかなか難しい。農業の後継者がいれば問題はないが、そうでない場合は、そのうち農業部門がおろそかになってしまわないかが心配。

6. 「緑の国土軸」専門アドバイザー聞き取り調査

「緑の国土軸」専門アドバイザーからの助言内容は、『人と自然との関わり』、『地域振興のあり方』、『ネットワーク形成』の3つに大別される。

専門アドバイザーからの助言のポイント (敬称略)

	助 言 の ポ イ ン ト
青森公立大学教授 佐々木 俊介	地域人材育成、ゆるやかなネットワーク形成
秋田県立大学助教授 蒔田 明史	人と自然、地域文化と自然、自然環境保全と適正規模の考え方
山形大学教授 中島 勇喜	環境保全と連携・協力
日本自然環境専門学校校長 五十嵐 実	環境教育、自然環境保全・再生と地域
早稲田大学教授 宮口 侗迪	地域振興(地域農業のあり方)、協働
(株)クリエイティブ・グルーヴィー 高峰 博保	中山間地域活性化(グリーン・エコツーリズム、林業経営)
希少野生生物保護専門員 長谷川 巖	自然環境保全と地域づくり
京都大学助教授 柴田 昌三	里山再生の方向、自然環境保全活動と NPO
兵庫県立大学教授 服部 保	里山再生の方向
鳥取大学教授 山本 福壽	森林の再生、行政・大学の役割
島根大学教授 伊藤 勝久	過疎地域の活性化、地域コミュニティ再生
秋吉台科学博物館名誉館長 庫本 正	自然環境・景観の保全、自然共生活動のあり方

(1) 『人と自然との関わり』

① 人と自然との関わり

「人間の生活はそれを取り巻く自然との関係を抜きに成り立たず、地域文化は地域の自然を背景として成立」(秋田県立大学助教授 蒔田明史)、「自然環境と農林業は相互に深く関わっており、農業や住民生活を後ろから支えているのは豊かな自然」(日本自然環境専門学校校長 五十嵐実)、「農業基盤整備に伴い生態系が大きく変化し、自然生息物がドンドン減少。里地里山や中山間地の荒れは人の心の荒れの現れであり、故郷の景観や文化が消えかかっている」(希少野生生物保護専門員 長谷川巖)、「里山は人の生業^{なりわい}の上に成り立ったものであり、資源としての里山全体の利用価値を新しく創り出さねばならない」(京都大学助教授 柴田昌三)、「本当の里山の生態や景観を知らないで、夢として描いたイメージにもとづいて、里山の保全や管理を進めていくとすれば問題である」(兵庫県立大学教授 服部 保)、「日本海沿岸地域の自然、風土の中から生まれた伝統的木造住宅は、地域の文化と知恵が凝縮されたものである」(鳥取大学教授 山本福壽)、「秋吉台の白い岩と広大な草原は人工的に維持されているもの」(秋吉台科学博物館名誉館長 庫本正)——と、専門アドバイザーはそれぞれの立場から、人と自然との関わりについての思いを述べられた。

② 豊かな自然と地域づくり

(秋田県立大学助教授 蒔田 明史 氏)

- 地域の自然、文化、生活をまるごと提案
- ツーリズム振興には適正規模の考え方が重要

蒔田先生は、天然記念物の保護行政に携わった経験をもとに、自然と生活、地域文化との関わりを示された上で、地域の自然、文化、生活をまるごと体験してもらうツーリズムを地域振興の有効なツールとして提案。その一方で、自然環境保全の観点からは『適正規模』の考え方が重要と強調された。

○これまで、「自然は自然」、「文化は文化」と別のものと考えていた傾向がある。しかし、地域文化の源は自然であり、自然に生まれ人々の生活がある。地域の自然、文化、生活をまるごとアピールしていく方向性が必要。地域資源と住民の生活の関わり方、つまり、地域住民やその生活自体をみてもらうという発想である。例えば、世界遺産「白神山地」を目玉としながら、地域の歴史・文化・地場産業・農作物など、地域の良さを広がりを持って示すことが必要である。

○都会地と比べ時間がゆっくりと流れている。ゆっくりとした時間を楽しんでもらうことも地域づくりの一つの方向である。ゆっくりとした時間を楽しんでもらう工夫も必要。

○自然とのからみでは、これまでの「多ければ多いほど良い」という発想から脱却し、その地域に見合った「適正規模」を色々な意味で考えることが重要である。例えば、白神山地は明らかに人が集まりすぎであり自然環境面でいろいろ問題が出ている。現在のツーリズムの形態では、自然への影響も大きいし、ブームが終わると長続きしないのではないかと懸念している。

(日本自然環境専門学校校長 五十嵐 実 氏)

- 自然環境保全には人々の『自然に対する無関心』をなくすことが重要
- 自然と生活や農業などとの関わり方を実現可能な仕組みにまで積み上げていく過程が重要
- 自然環境浄化活動を起点とし活動の幅を拡大(歴史、文化などをベースとした地域活性化へ)

五十嵐先生は、体験を通じた自然保護への啓発活動の重要性を強調された上で、環境教育実践、朱鷺の野生回帰活動などの経験をもとに、自然環境保全事業の具体的進め方を助言され、加えて、自然環境保護活動を起点とした幅広い地域づくり活動の展開方法を提案された。

○自然環境悪化の根底には、人々の『自然に対する無関心』がある。一人でも多くの人が自然にふれ、自然の大切さを肌で感じてもらうことなど、無関心でいられないよう息の長い努力が必要である。

○自然のすばらしさ、大切さを、次世代を担う子供達にしっかりと伝えていくことが特に重要である。

○地域づくりの観点も加え、農林業関係者、都市住民、行政など、色々な主体を巻き込み、自然と生活や農業などとの関わり方を幅広い視点から検討していくことが必要である。批判的な意見も含め、様々な意見、アイデアを掘り起こし、実現可能な仕組みとなるまで積み上げていく過程が重要である。

○朱鷺の野生回帰でも、地域住民、農業従事者、行政担当者、ボランティアなどの協力が不可欠であり、多くの人の手間暇と、自然環境整備のためにコストがかかる。「ボランティア等をどう組み込みどうサポートするか」、「都市住民が参加して楽しい仕組みをどう作るか」、「自然再生のためのコスト・労力を誰がどのように負担していくか」——などの検討は避けて通れない。

○地域の自然環境浄化活動に学校、生徒、父兄などを巻き込み、活動の輪を広げていくことが地域づくりの観点からは重要である。自然環境浄化活動を起点とし、地域の自然や歴史・文化の見直しにつなげ、地域の自然や歴史、文化などをキーとした地域活性化へとつなげていくことも重要である。

○活動全体を総括・調整し、組織を引っ張っていくリーダーは、企業管理者としてマネジメントに長年携わってきた団塊の世代の人に活躍してもらった方が良い。これは、自然保護活動に限らず、地域の色々な活動において極めて重要である。

(希少野生生物保護専門員 長谷川 巖 氏)

- 里地里山や中山間地域の荒れは人の心の荒れの現れ
- 地域の自然や文化を発見し考える『地元学』的な進め方が重要
- 子供達が自然のすばらしさ、大切さを体験する「エコ・キャンプ」は有効な手法

長谷川先生は、希少野生生物の生態研究、自然環境保全活動の経験をもとに、自然環境保全事業の具体的な進め方を助言された。

- 里地里山や中山間地域の荒れは人の心の荒れの現れであり、故郷の景観や文化が消えかかっている。
- 自分達の住んでいる地域の自然や文化を勉強しその良さを発見し考える『地元学』的な進め方が重要である。「地元学」、「集落のお宝探し」などを通じて、子供の体験に父兄も巻き込んで、輪を広げていく息の長い取り組みが必要である。
- 子供達が自然の中でキャンプし、自然のすばらしさ、大切さを体験する「エコ・キャンプ」は有効な手法である。地元の人達も、エコ・キャンプを運営し子供達を指導する過程を通じ、自然や動植物の生態を知り、自然環境復元の考え方や手法を体験していくことになる。

(京都大学助教授 柴田 昌三 氏)

- 資源としての里山全体の利用価値を新しく創り出さねばならない
- 里山の管理ノウハウを途絶えさせないよう伝承していくことは喫緊の課題
- 生物の多様性だけを視野に入れて里山再生を図る考え方には賛成できない
- 自然環境保全活動には、最低限共有すべきレベルやベースがあるべきだ

柴田先生は、「里山の新しい利用価値創造」「里山管理技術継承」「生物多様性維持と里山再生」など、里山再生についての方向性、考え方を示された上で、自然環境保全の市民活動を促進する際の行政・大学等の重要な課題として、活動のベースとなり共有すべき基本知識や考え方の習得体制について問題提起された。

- 里山は人の^{なりわい}生業の上に成り立ったものであり、資源としての里山全体の利用価値を新しく創り出さねばならない。
- 里山管理技術を持っている人は減少を続けており、そのノウハウを伝承していくことは喫緊の課題である。
- 里山の生物多様性は人間が手を加えて利用した結果である。生物の多様性維持のため里山を維持しないと考えるとかなりの無理が生じる。

○各団体、グループがそれぞれの考え方にに基づき活動を行っており、自然環境保全活動に共通するベースがない。これが一番の問題点である。自然環境保全活動の基本的考え方・知識をきちんと指導する人材・仕組みを整備することが、行政・大学の重要な課題である。

(兵庫県立大学教授 服部 保 氏)

- 本当の里山の生態や景観を知らないで里山の保全や管理を進めていくことは問題
- 国は里山を長期的にどう再生・管理していくかというビジョンを国民に示すべき
- 里山を昔の里山とは異なった新しい森として捉え、それにふさわしい管理のあり方の検討が必要
- 「環境林」「文化林」として新たに里山を位置づけ、再生・整備する方向(兵庫方式)の提案

服部先生は、幅広い市民の理解、協力を得ていくには、国としてきちんとしたシュミレーションを行った上で、わが国の緑資源、自然の将来像、目標像を明確に示すことが極めて重要であると強調された上で、「環境林」「文化林」として新たに里山を位置づけ再生を進める「兵庫方式」を提案。

○本当の里山の生態や景観を知らないで、夢として描いたイメージにもとづいて、里山の保全や管理を進めていくとすれば問題である。

○日本全体をみると、里山を長期的にどう再生・管理していくか方向性が固まらず、道筋も示されていない。国(環境省、林野庁)は、緑、里山の再生ビジョンを国民に示すべきであろう。

○里山を、昔の里山とは異なった新しい森として捉え、それにふさわしい管理のあり方を検討していくことが必要である。兵庫県は、里山の持つ環境機能、文化機能を重視し、「環境林」「文化林」として新たに里山を位置づけ、再生・整備する明確な方向性を打ち出している。

○幅広い市民の理解、協力を得ていくため、自然、緑の現状、このまま放置した場合の問題点をきちんと把握した上で、わが国の緑の資源、自然の将来の方向性、目標像を国民に明確に示してもらいたい。

(鳥取大学教授 山本 福壽 氏)

- 日本中の森林で最大の問題は、適切な間伐をどう行っていくかにある
- 林業の不振は、外材との競合などから国産材が円滑に利用できない状況が大元にある
- 地域の文化と知恵が凝縮された伝統的木造住宅の見直しにより地元産木材の利用を促進
- 観光開発は自然とどう向き合うかが問題であり、保健休養林的、医学的利用を目指すことが適切
- 市民による自然保護活動のベースとなる自然の基本的理解やネットワークづくりは、行政や大学の果たす役割が重要

山本先生は、林業の不振、適切な間伐の必要性など、わが国の森林が抱える問題を整理された上で、伝統的木造住宅見直しによる地元産材利用促進、豊かな自然を活用した観光開発のあり方、市民による自然保護活動の問題点と行政や大学の役割、地域における豊かな生活のあり方などについて、幅広く問題提起された。

- 森林の中で最も大きな問題を抱えているのは人工林である。戦後の拡大造林計画は、間伐材も売れる前提でシミュレーションされたが、日本の高度成長によりあらゆる前提が全く変わってしまい、当時のシミュレーションが全く成立しなくなった。
- 森林で最大の問題は適切な間伐をどう行うかにある。森林伐採はボランティア活動に頼る面も強まっており、実践的ボランティア支援や森林保全に関する教育啓発活動が今後一層重要となってくる。
- 林業の不振は、外材との競合などから円滑な国産材利用ができなくなっていることが大元にある。伝統的木造住宅は地域の文化と知恵が凝縮されたものであり、その見直しにより地元産木材の利用を促進することは地域にとっても意義がある。
- 観光開発は自然とどう向き合うかが問題であり保健休養林的、医学的利用を目指すことが適切である。リフレッシュと同時に自然を学習できる資源は日本海側地域に豊かである。しかし、自然を観光に利用する場合は、適切なルール作りとルールに従った利用が必要である。
- 市民による自然保護活動のベースとなる自然の基本的理解や、グループ相互の連携、広域的ネットワークづくりには、行政や大学の果たす役割が重要である。

(秋吉台科学博物館名誉館長 庫本 正 氏)

- 秋吉台の広大な草原は人為的に維持されているが、その地形を利用した『ドリーネ耕作』減少や観光の影響から、植物が生えなくなり土壌浸食が進んでいる
- 秋吉台を自分たちで守り育てていくボランティアグループが必要
- 地域の市民活動活性化には、活発な日常活動を展開し地域をリードするグループの育成が重要
- 観光振興はまず人をもてなす心から始めれば、人との触れ合いが深まり地域活性化にもつながる

庫本先生は、秋吉台の自然と景観を守り育ててきた先人の努力を紹介された上で、秋吉台の環境保全と地域開発を踏まえてボランティア活動の目指すべき方向性を示された。

- 秋吉台の白い岩と広大な草原は人工的に維持されている。
- ボランティア活動を通じて自然をわかってもらえる。人と人との交流も生まれる。
- 観光はお金から入るのではなく、人をもてなす心から始めればよい。それが地域活性化につながる。昔は素人芝居など見返りを求めない観光客へのもてなしがあった。今の秋吉台観光にはそういうものがない。
- 自然共生のボランティアグループは、パッとできるが、日常的に活動しているものは少ない。活動的なグループがぐいぐいと引っ張っていかないとうまく回らない。そういう活動的なグループを作らないといけない。

(2) 『地域振興のあり方』

(早稲田大学教授 宮口 侗迪 氏)

- 中山間地農業は少人数でもきちんとマネジメントできる取り分の多い農業に向かうべき
- 自然の豊かさを日本海という軸で主張していくには「ツーリズム複合タイプ農業」が重要
- 現在の地域づくりのキーワードは『協働』

宮口先生は、水田稲作が主体の日本海沿岸地域の農業が向かうべき方向を示され、自然の豊かさを主張していく「ツーリズム複合タイプ農業」を地域振興の有効な方策として提示された。

- 水田稲作が主体の日本海沿岸地域では、農地を維持し農業で生きていくには2つの方向がある。平野部農業は少人数でもできる農業を目指し大規模化、効率化推進。中山間地農業は少人数でもきちんとマネジメントできる取り分の多い農業の仕組みを創り出すことである。
- 日本海沿岸地域の自然の豊かさを日本海という軸で主張していくことは可能であり大きな力になる。具体的に整理してみる必要がある。例えば、雪をハンデとする考えが強いがマイナスばかりではない。
- 「ツーリズム複合タイプ農業」が重要。しかし、足を運んでもらうには山や農村が荒れていては魅力がない。都市と違う価値観、人が来てくれる存在価値が必要でありそういう農村を増やすことが重要。
- 現在の地域づくりのキーワードは『協働』。色々な主体がそれぞれの得意分野を活かして力を合わせ、プロジェクトを推進していく『協働』の時代である。

((株)クリエイティブ・グルーヴィ 高峰 博保 氏)

- グリーンツーリズムに比べ、エコツーリズムは業として成り立つ
- 実際に山を守っていくことはボランティアでは困難であり、『業』として成立することが大切
- 集団化による効率的な林業経営と利用価値を高める工夫により林業は商売として成立

高峰先生は、中山間地域の一つの生業としてエコツーリズムの有望性を提示。加えて、森林保全におけるボランティア活動の限界と、新しい林業経営のあり方を提案された。

- グリーンツーリズムは農山漁家が片手間に行っているのが実態でありそれだけで生活していくことは困難。エコツーリズムは参加費もグリーンツーリズムに比較し高く専業経営が可能である。
- ボランティアはある程度活動の輪は広がるが継続が難しい。誰かの献身的な犠牲がないと活動を維持することはできない。森林保全ボランティアは『山を守ろう』という啓発にはなっても、実際に山を守るまでの仕事はできない。山を守っていくためには『業』として成立していくことが大切である。経済的に成立するシステムを作ってはじめて人工林の保全ができる。
- 集団化による効率的な林業経営を行い間伐材の利用価値を高めていけば林業は商売として成立する。

(島根大学教授 伊藤 勝久 氏)

- 過疎問題は市町村単位で語られることが多いが、コミュニティ単位では安定しているものもある
- 社会減は続いているがほとんど自然増減のない集落もあり、集落の活力が失われていない
- 活力維持は「昭和一ケタ」「昭和 25 年～30 年」生まれ「15 歳～20 歳」の 3 世代が併存する集落
- 多世代同居、混合所得構成、複合的家族経営が定住への安定的形態
- 今、住民が求めていることと政策の支援目標がズレている。地元はそこで安定して生活していくことができればよい。農業振興だけではないはずだ。
- 活性度は、生産基盤や収入の大きさではなく、そこに住む人が地域をどう考えているかによる

伊藤先生は、コミュニティを単位とした地域活性化の要件を整理された上で、そこで安定して生活を送ることができる農山村振興策の基本的考え方を提言された。

- 過疎問題は市町村単位で語られることが多いが、コミュニティ単位では安定しているものもある。
- 活力を維持しているのは「昭和一ケタ」「昭和 25 年～30 年」生まれ「15 歳～20 歳」の 3 世代が併存する集落であり、「地元でなんとかやっていこう」という気迫が見られる。15 歳～20 歳の世代が、どう地元に残り、また帰ってくるかが地域の展開の鍵を握っている。
- 元気なムラの要因としては、景観が美しいこと、子供が多いこと、老人が遊んでいないこと。
- まず世帯レベルで安定すること、次に 10～20 戸の集落レベルで安定すること。集積が進んでいけば、できることが増えてくる。このような活性化したコミュニティが増えていけば、地域が活性化する。
- 今、住民が求めていることと政策の支援目標がズレているのではないか。住民としては、地域に安心して住めるかどうかが問題で、地域が求めていることに政策が反映されていない。それは農業振興だけではないはずだ。農業振興だけだと地元には厳しい内容にならざるを得ない。
- 地元で対応できない部分、公共が担わないといけない部分をきちんと分類し、地域の活力レベルに応じて提供する形を作っていく必要がある。
- 村の活性度は、生産基盤の大きさや収入の多さではなく、そこに住んでいる人が地域をどう考えているかにかかっている。内発力の積み重ねが大切である。農業生産を上げるやり方、農業形態を変えるやり方など、いろいろな方法を地域で考え展開させていくことが大切なのではないか。

(3) 『ネットワーク形成』

(青森公立大学教授 佐々木 俊介 氏)

- ネットワークは様々な人材が参加しやすい「緩やかなネットワーク」が有効
- 「緩やかなネットワーク」に参加し、刺激を受け合う中から地域をリードする人材が育つ

佐々木先生は、地域をリードする人材育成には、幅広い人達が気軽に参加でき互いに刺激を与え合う「緩やかなネットワーク」構築が有効な方策と提言。

○シンクタンク、県の様々な委員会などで知り合った人達と「緩やかなネットワーク」を構築。ネットワーク参加を通じて、参加者の活動のレベルが高まり地域を引っ張る人材に成長した。

○地域づくりのリーダーを作ることは、まず「足元を見つめなおす」ことからスタート。

(山形大学教授 中島 勇喜 氏)

- 課題解決のため、関係機関が連携した一体的、総合的な取り組みが必要
- 共通の課題解決のため、関係機関が横断的に議論し調整できる場が重要

中島先生は、課題解決のため、関係機関が連携した一体的、総合的な取り組みが必要と助言された。

○海岸林が抱える最大の課題である「松くい虫」の被害は、行政上の境界は関係なく発生するものであり、課題解決のためには、関係機関が連携した一体的、総合的な取り組みが必要。

○共通の課題解決にかかわる国、県、市町村、教育機関、住民団体、関係機関などが横断的に議論し調整できる場が重要。

(4) 行政への要望事項

<人と自然との関わり>

- ・過疎化が進行している地域では、そこで若い人が働ける仕事があることが大きな意味を持つ。地域に根をおろした若い人を核に色々なことが広がっていく可能性が出てくる。問題は若い人の仕事の間がありどれだけ根付くかである(秋田県立大学助教授 蒔田 明史 氏)。
- ・農薬使用、農業のは場整備、農業用水のコンクリート化などにより、生物の生息環境は厳しい状況にある。自然環境保全・改善と、農業、林業、生活のあり方を様々な角度から考え、実行に移していく必要がある(日本自然環境専門学校校長 五十嵐 実 氏)。
- ・農林水産省の農業基盤・農村整備施策と国土交通省の国土保全施策、環境省の自然保護施策は、それぞれバラバラのような気がする。ドイツの地域開発は全体的な土地利用計画の元に1本化され細かな利用が行われている(希少野生生物保護専門員 長谷川 巖 氏)。
- ・環境省は「生物の多様性維持」に力を入れている。しかし、生物の多様性維持のため里山を維持しないと考えるとかなりの無理が生じる。生物の多様性だけを視野に入れて里山再生を図る考え方には、私は賛成できない(京都大学助教授 柴田 昌三 氏)。
- ・自然環境保全活動のベースをNPOや市民グループにきちんと伝え、指導する人材がいない。また、きちんと機能する仕組みが国・地域で整備されていない。それが、行政や大学研究者にとって、自然環境保全の市民活動を促進する際の重要な課題である(京都大学助教授 柴田 昌三 氏)。
- ・現在は、森林の将来像、長期的な予測には全く手がつけられていない状況にあり、自然、緑の現状、このまま放置した場合の問題点をきちんと把握した上で、方向、目標とする将来像を定めねばならな

い。国に、わが国の緑の資源、自然の在り方について、将来の方向性、目標像を国民に明確に示してもらいたい(兵庫県立大学教授 服部 保 氏)。

- ・実践的ボランティア支援や森林保全に関する教育啓発活動を進めていくことが、今後ますます重要。森林間伐を「山へ行き木を切るスポーツ」として普及するのも一つの方向と思っている。山や森を遊びの空間として考えなおしてみるべきではないだろうか。(鳥取大学教授 山本 福壽 氏)
- ・市民グループによる自然保護活動は、一生懸命活動していても間違った方向を向いていることもある。やはり、自然の基本的理解が必要でありそれが活動のベースとなる。また、自然保護を行う NPO 等の活動は、相互連携や情報交換の広域的なネットワーク作りが今後重要となってくる。自然保護活動の指導や啓発を通じて多くのグループと接点を持つ行政や大学が大きな役割を果たさねばならない(鳥取大学教授 山本 福壽 氏)。
- ・地域の市民活動活性化には、活発な日常活動を展開し地域をリードするグループ育成が重要(秋吉台科学博物館名誉館長 庫本 正 氏)。

＜地域振興＞

- ・都市と農村のあり方を考えると、総人口が減少へと向かう中、都市拡張には歯止めをかける時がきている。都市の空洞化対策や隙間活用が課題となっている今、住宅供給は都市郊外拡大ではなく都市再開発で賄うべき。都市近郊平野部は大規模化・効率化が可能な農地を維持しより有効に活用する方向を目指すべきである(早稲田大学教授 宮口 侗迪 氏)。
- ・今、住民が求めていることと政策の支援目標がズレているのではないか。農業でいえば、食料政策や環境面から、大規模農家や認定農家、集落営農を対象にしている。しかし住民としては、地域に安心して住めるかどうかが問題で、地域が求めていることに政策が反映されていない(島根大学教授 伊藤 勝久 氏)。
- ・行政は、地元で対応できない部分、公共が担わないといけない部分をきちんと分類し、地域の活力レベルに応じて提供する形を作っていく必要がある(島根大学教授 伊藤 勝久 氏)。

＜ネットワーク形成＞

- ・行政情報はとても貴重だが行政は気づいていない。もっと情報提供してほしい。
- ・行政は、『目立つ』活動を支援しがちだが、地味な目立たない活動を支援してほしい。
- ・セクション毎にバラバラの対応にならないようにしてほしい。『総合窓口』のような職員が育てばよい(青森公立大学教授 佐々木 俊介 氏)。
- ・行政の縦割りの弊害がまだある。海岸整備に関しても、海岸、砂防、林野などいろいろな機関が関係している。それぞれの連絡調整が今はうまくいっていない(山形大学教授 中島 勇喜 氏)。